

# 何故, Ralph Ellison は生涯に一作しか 完成させなかったのか？ *Invisible Man* 考

寺沢みづほ

## 1

黒人作家 Ralph Ellison (1914-1994) の初めての長編小説 *Invisible Man* (1952) は、すべての20世紀アメリカ小説の中でも屈指の名作の一つと見なされている作品である。公民権法が成立する1964年以前の、人種差別が公然と行われていた時代に発表されたこの小説は、当然ながらアメリカの人種差別という重い問題を取り扱っている。しかし後述するように、この小説が問題とするのは、差別行為そのもののみならず、差別を容認するアメリカの文化基準が個々の黒人と白人の双方の意識（および無意識）に深い影響を及ぼし、人間相互の認識を破壊的なまでに歪めているという状況であり、この状況の中で、自己喪失だった段階から自己を取り戻す探求をする黒人青年の壮絶なドラマが、小説の根幹となる。

通常の長編小説の2倍の長さと言えば分かりやすいだろうが、Vintage Editionで581ページの量になるこの長編小説は、自分のアイデンティティを探求する19歳の黒人青年の独白的回想で全編が展開されるが、彼の名前も——さらには、小説後半で彼が属することになる左翼政治組織が、彼につけてくれた政治活動上の名前さえも——、最後まで明らかにされない。作中人物の名前が、その人物の本質や運命を象徴するという小説も多い中で、ここでは主人公の特質は「名無しであること」である。その名無しの主人公が、不条理の迷路のような状況を彷徨するドラマがこの小説の枠組みであるが、この小説の顕著な特徴の一つは、ユーモアの介在である。主人公がたどる探求の経験は、訳の分からない力に翻弄されるばかりの不条理極まりない残酷なもの、存在を根底から覆すような裏切りにさらされる苦しみの連続であるが、その成り行きには常にグロテスクなユーモアが底流している。乱闘の中で入れ歯（第10章）や義眼（第22章）が飛び交ったり、黒人売春婦たちが、アメリカの最上層階級の一員である白人富豪の老人に関して、“don't you know that all these rich ole white men got monkey glands and billy goat balls,” “That ole white man right there might have

him a coupla jackass balls.” (88)<sup>1</sup> —— こういう白人は、全員が猿の生殖器と雄山羊の睾丸、雄ロバの睾丸を持つから、おもちゃにしようよ——と、従来の常識を転覆させて白人を動物扱いする吃驚仰天の発言をしたりすること、さらには別の黒人男が、実の娘と近親姦を犯した経緯を語る際に、深刻さの重点が、話し手と聞き手の間でずれるために起こるユーモア——睡眠中に娘の体の中に入ってしまった父親は、目が覚めた時、すべての聞き手が当然期待するように、「早く娘の体から出なければ」と焦るのだが、その一方で「動けば罪になるが、動かなければ罪にならない」という信念も持っていて、両方の板挟みになり、ぐずぐずしているうちに他者に見つかり、騒ぎが大事になる——など、さまざまな質の笑いが、深刻な不条理ドラマの中に一貫して流れている。

勿論、この含蓄に富む小説にあるのはユーモアだけではない。581 ページという長い物語の大半が象徴で満ちているし、またその一環であるが、フロイト的な精神分析と夢が象徴的な意味を持つものとして繰り返し提示されている——作家修業時代の Ellison が精神分析医のクリニックで患者のファイル整理のアルバイトをしていたおかげで、この種の知識が得られたのである——し、物語を語る主人公の声が、彼の意識の遥か下の部分にまで入り込むこともある。また、この一人の黒人青年のドラマの中に、個人を超越した黒人民族の記憶（奴隷時代の黒人女が自分を性的に使用し続けた白人男性主人に対して抱く思い）が象徴的に含まれることも一度あり、こうした含蓄が作品の内容をより豊かにしていることは間違いない。

Ellison 以前の黒人文学の特徴と見なされていた抗議性——差別の現状の告発と抗議——、このようなステレオタイプの「黒人文学性」をはるかにしのいだと目されるこの小説は、発表当初から今日に至るまで、最高級の評価を付与され続けている。まず作品を発表した 1952 年、Ellison は黒人作家として初めて全米図書賞を与えられた。これは画期的なことであるが、毎年必ず誰かには与えられるこの文学賞受賞よりずっと重大で桁外れに高い評価がこの作品に付与されていることを示す次の事実がある。作品発表から 13 年を経た 1965 年に、アメリカの文芸批評界で有名な 200 人以上の批評家たちに対して行なわれたアンケート、「第二次世界大戦以後に出版されたアメリカ文学の中で、最も傑出した作品は何だと思うか」において、*Invisible Man* が圧倒的多数の票を得て一位に輝いたのである。以上のように、この作品に関しては、「単なる出来が良い作品」のレベルをはるかに超えた「20 世紀アメリカ文学の中でも最も意義深い作品の一つ」という評価が、今日に至るまで変わることなく言いたてられている。

このような作品を書いた Ralph Ellison の経歴は変わっていて興味深い。というのも、彼はもともと作家志望であったわけではなく、大学時代まではジャズ・ミュージシャンになることを目指していた人間だからである。早くに父親を亡くし、貧しい黒人母子家庭で育った Ellison は、幼いころから卓越したトランペットの才能を発揮し、さらに子供でもできるアルバイトをして金を稼ぎ、その金でトランペットの個人授業を受ける、という努力を重ねていた。やがて奨学金を得て進学した黒人大学 Tuskegee Institute ——後述するように、この小説の前半のドラマの舞台となる黒人大学は、実在の Tuskegee が露骨過ぎるほどにモデルになっている——でも音楽を専攻し、プ

口の演奏家、作曲家になることを目指していた。しかし、さまざまな分野への知的好奇心が旺盛な Ellison は、文学の読書も続けており、Ernest Hemingway, T.S. Eliot, Gertrude Stein, James Joyce などのモダニズムの作家の作品を特に愛読していた。彼が大学3年までを終えたところで奨学金が尽き、卒業までの1年分の授業料を稼ぐという目的のために、Alabama 州の Tuskegee から New York の Harlem に出たのは1936年の夏であった。この時期は言うまでもなく大恐慌の最中であり、New York の Harlem を中心に黒人作家たちの活動も盛んに行なわれていた時期でもあり、若い Ellison は、既に作家的地位を確立していた Langston Hughes, 黒人文学の傑作となる *Native Son* (1940) や *Uncle Tom's Children* (1938) を書く直前の、気力がみなぎっていたであろう Richard Wright と知り合いになり、彼らの勧めで、まずは黒人文化雑誌の書評欄を書くことで文学活動を始めた。やがて彼は短編小説を書くようになり、音楽から文学へと人生航路の方向を転換させていく。作家となった人が、それ以前に多様な経歴を持っていたことは不思議ではないが、それでもなお、プロのジャズ・ミュージシャンになることを志して長年の精進を重ねながら、音楽家にならずに作家になり、そして初めての長編で「20世紀アメリカ文学の最高峰の一人」となったという経歴は、やはりかなりの変わり種になるだろう。

もう一つ特筆すべきことは、Ellison の作家的業績がひとえに *Invisible Man* というこの一作だけだということである。授業料を稼ぐための短期の出稼ぎのつもりで New York に出た Ellison は、結局そのまま New York に居ついてしまい、Tuskegee での音楽の勉強は途絶することになった。New York, Ohio<sup>2</sup>, また New York と住まいを変えながら、彼は作家修業を続けるとともに、フリーランスの写真家としても働くなど、多彩な才能を発揮して修業時代を乗り切っている。*Invisible Man* の執筆には7年間かかった——ということは従軍していた第二次大戦が終了したあたりから7年間、この作品を書き続けていたことになる。30歳から37歳という最も創作力が充実していたはずの時期の努力が *Invisible Man* に注ぎ込まれたのである。勿論この作品の執筆以前に、習作として幾つも短編作品を書いていた。これらの短編は、執筆された当時に雑誌に掲載されはしたが、Ellison の短編集としてまとめて出版されることはなかった。執筆から半世紀以上経って、そして Ellison が他界した2年後の1996年になって、ようやくこれらの初期の短編をまとめた短編集が出版された。収録された16の短編の中の最後の作品の題名を取って *Flying Home* と名付けられた死後出版のこの初期短編集の中に、*Invisible Man* に繋がる要素は幾つか見出せるとしても、個々の短編の完成度や価値は、特に傑出しているとは思えない。即ち、作家となるための助走の段階——短編執筆——は凡庸であるのに、そこから突然に傑作 *Invisible Man* へと大きすぎる飛躍を果たしたわけであり、これは文学史上でも稀有な突然変異の成長だと言える。

*Invisible Man* を発表した1952年、Ellison はまだ38歳という若さであった。この時点から80歳で生涯を閉じるまで、Ellison には42年の年月があったのだから、彼のさらなる作品が発表されることを読者は当然にも期待していた。しかし、その「次の作品」が発表されることはなかった。勿論42年間 Ellison が何一つ書かなかったわけではない。1950年代から1960年代のアメリカは、公

民権運動や、それに伴う多くの暗殺や暴力的な混乱が生じた時期であり、Ellison はそれらを題材にした長編小説 *Juneteenth* を 12 年かけて執筆したのだが、完成できなかった。執筆途中の 1967 年の自宅の火災で原稿 300 枚を焼失させてしまい、記憶をもとに焼失した原稿を再現し、さらに書き進める行為を続けて 2000 枚まで書き続けたが、ついに完成させることがないまま Ellison は世を去ることになる。火災による原稿焼失という作家にとっての大不幸はあったにせよ、あれほどの華々しい成功を収めた 38 歳という若さの Ellison が、その後の 42 年間において書く努力を続けながらも作品の一つも完成させなかったことは、意外である。

このような成り行きは謎とも思えるが、私は、*Invisible Man* という作品の中に、次の創作展開を困難にさせている要素が含まれていると考えている。それは極めてシンプルなこと、作品と批評の関わり方である。この作品自体は非常に優れた質を持つ面白い作品であるが、本論でその一部を示すようなかなりの弱点をも持つ。しかし、作品発表から絶賛ばかりが続いたために Ellison は克服すべき目標を定めることができず、この作品からの脱却が難しかったのだろうと私は推測し、その根拠を本論で展開する。

弱点の一つが、最後の *Epilogue* の問題である。その点に言及するために、作品の構成の概略を述べると、以下ようになる。まず、主人公が自己探求の放浪を絶望の中で既に終えて、その挙句に New York のビルの秘密の地下室で暮らすことになったことを語る *Prologue*、次にそこから時間をさかのぼり、高校の卒業式の日から大学 3 年時の大事件、それから大学を退学させられ、New York に出て経験する不条理極まりない物語（以上がドラマの前半）、さらに大学復学を諦めて New York で無為の日々を送る中で、やがて演説者としてスカウトされた左翼政治団体 *Brotherhood* の中で頭角を現しながら、同時に訳の分からない力によって裏切られ、地下生活者になるまでの経緯（ドラマの後半）が語られる、そして前半と後半はおおよそ対になっている。例えば先にも述べたように、前半結部の乱闘シーンで入れ歯が飛び、一方後半結部の乱闘シーンで義眼が飛ぶなど。このようにして、作品の 98.3% が提示された後、10 ページの *Epilogue* が付けられ、ここで主人公は、地下生活をやめて再び地上の現実生活に戻る意思を表明する。この部分で述べられる主人公の思考は、それまでの話のトーンとは全く正反対の話になるのだが、この新しい決意の萌芽なり準備なりの話は、それまでの中に全く見出せない。ちなみに、*Prologue* は全体の 2%、全部で 25 の章で展開される前半と後半のドラマが 96.3%、そして最後の *Epilogue* が 1.7% である。この 1.7%（10 ページ）で、それまでの記述を逆転させる内容の話が脈絡ゼロのまま付け加えられているのであり、この不可解な「転調」がそれ以前の展開といかなる不整合を起こしているかは、本論で詳しく述べる。

この不可解な「転調」の *Epilogue* は、小説の大半から遊離しているのだが、それにもかかわらず、ドラマ全体が含んでいる大きな特質と関連して持ち出されたものだというのが私の考えである。その具体的な内容を簡単に示そう。小説の中心に来る 96.3% の主人公の彷徨自体は波乱万丈のドラマであるが、25 の章の最初の時点から最後の時点までの主人公の内面に焦点を当ててみれば、その振幅の大きさは不釣り合いに、内面の動きの幅は実は大きくはない。つまり、「自分は

invisible man であったのに、そのことを認識していない無知の段階にあったが、苦痛な経験を通して invisible man であることを認識する段階に至った」というのが、この小説の精神的な動きのほぼすべてである。Invisible man という「異常な」状況は作品全編を通して持続的に言及されるのだが、その異常状況の緊張が作品に流れ続けて読者に衝撃を与えているとしても、そこに流れる内面ドラマの振れの幅はさほど大きくない。そもそもこの小説は、主人公が冒険の旅を続ける型のピカレスク小説であり、ピカレスク小説の主人公は成熟とは無縁なものであるのだから、内面の変化の幅が大きいはずがない。この記述には反論が飛んでくることは予想している。主人公は、過酷な経験をし、痛みという代償を払ったおかげで、人生に対する理解が格段に深くなった、見えなかったものが見えるようになった、「分かる」ようになったことをたびたび述べる（508, 570, 576 等々）のだから、内面変化の幅は大きいはずだと読者は思い込みがちだからである。その内面の動きとは、「せいぜい」invisible という枠組みの中の話であり、その枠組みを破って新たな境地に向かう契機はここには存在していない。その意味で内面の振幅幅が小さいのである。この主人公の内面ドラマの停滞性を補うものとして、最後の Epilogue の唐突な「転調」があるというのが私の考えであり、本論でそのことを詳述する。

内面変化の幅が小さいと言明する時、私が考える「幅」の基準を、ここで付け足しで示しておこう。小説の中で主人公が経験する「目覚め」の度合いをより正確に理解するためにも、比較するものを見ておくことは重要である。以下に示すのは、歴史学者の阿部勤也の「＜自分の中＞を掘るということ」の中の一節である。

私は学生時代から今日に至るまで、常に「解る」とはどういうことかという点について考えてきました。「解る」ということをどのように考えていますか？「解る」とは、「それによって自分が変わること」です。これは私の恩師の上原専禄先生の言葉なのですが、私もそのように考えます。「解る」ということは、ただ知るということ以上の、例えば個人の人格にまで深くかかわってくるような事件なのです。<sup>3</sup>

学者が自分の疑問を追究することと、人種差別の時代を生きる作中人物の体験とは、質が違うという声も聞こえてきそうだが、自己内部の認識構造の一大変化という点では、学問的追究も現実の人生も変わらない。この予防線を張った上で論を進める。問題を考え抜く時、自分の外の問題だけの探究ではなく、必然的に自分の中を掘り返すことが同時に行なわれ、その結果、課題問題の答えをつかむのみならず、見えなかった段階の自分の認識構造から、見えるようになった自分の認識構造へと自己変容——自分が変わること——が起こる。同じことを様々な人が言っていて、私もこの考えに強く共感している。

この基準を *Invisible Man* の状況に当てはめてみるならば、小説も主人公も invisibility という枠組みの中に留まり続けているということである。勿論それは作品独自の個性であり、そのことだけ

をもって、即、弱点だと言うつもりはない。私が本論で証そうとしているのは、このような特質——作品の内面ドラマ自体の動き幅の小ささ——と、奇妙な「転調」との不可分の関わりである。この関心から作品独自の個性を解明していこう。

## 2

*Invisible Man* を要約するならば、「アメリカの夢」への執着と幻滅である。まず第1章の冒頭で、主人公の祖父の遺言が与えた衝撃が示される。祖父——奴隷として生まれたが、奴隷解放宣言を受け、人間としての権利と尊厳を与えられるというアメリカ政府の約束を信じたが、それが全くの空手形でしかなかったことを実感するという人生を生きた祖父——は、アメリカ黒人が辿った運命の凝縮でもある。祖父は、このような現実の中で、白人に対する“yes”という同意発言と追従のニヤニヤ笑い (grin) だけで生きるという面従背反の生き方を貫け、それは心からの追従であるどころか、逆に白人を滅ぼすための戦いなのだ、息子も孫もこの戦いを必ず継続し、そして白人を“death and destruction” (16) に追い込めと遺言する。このように祖父が提唱しているのは、卑屈な追従を通じた抵抗という非常に屈折した「面従背反」である<sup>4</sup>。そんな抵抗より、直接に白人に(アメリカ政府に)ノーを突き付ければよいと思うかもしれないが、そのような直接的な自己の意思表示をしようものなら、リンチなど残虐な形で命を奪われる危険にさらされた時代があったことを忘れてはならない。「アメリカ政府は黒人の権利を公文書で保証しているのに、現実的にはそれが空手形に過ぎない時代を生きる黒人にとって、リンチで殺されずに生き抜くには二つの道がある、一つは、現実の状況が不条理だという認識を抑圧し、目前の状況を自発的に受け入れ、その価値観に同化し、その価値観の中で社会的出世を果たそうとする道、もう一つは、たとえ振る舞い方は同じでありながら、心の奥底で背反の思いを持ち続けることだ」と作品は言っている。この遺言を死の間際に残した祖父は言うまでもなく後者である。

一方、小説開始時の *Invisible Man* の主人公の若者は前者であり、前者の特質を引きずっている限りにおいて、主人公は自分を嘲笑する祖父の幻影に憑かれ続ける。この主人公は、Ellison がテキストに合わせて書いた“Introduction”で使った説明表現を引くならば、“he was young, powerless (reflecting the difficulties of Negro leaders of the period) and ambitious for a role of leadership; a role at which he was doomed to fail.” (xix) という状況にあり、上昇の野心を果たすために白人に迎合し、自発的に自分を見失っている存在である。

高校卒業式で、優等生である主人公は卒業生代表として「現状のままの白人と黒人の融和が可能だ」というテーマのスピーチをし、そのスピーチが教育長の目にとまり、町のお偉方である白人たちのパーティで再度行うようにと、会場であるホテルに呼ばれるのだが、その会場で最初に彼に命じられたことは、衣服を脱ぎ、目隠し布を付けて、他の9人の黒人少年とボクシングの battle royal (最後の一人が勝ち残るまで死闘をすること) をすることであった。優等生としてスピーチをするために呼ばれたホテルで、何故ボクサー・パンツにグローブという思いもよらぬ格好をし

て、おまけに目隠しをしたまま、battle royal をしなければならぬのか、主人公には分からないし、今現実には何が起きているかを理解することを遮断されたままがむしろに殴りあうしかないこの状況は、主人公の以後の不条理な人生航路を予言することになる。このホテルで、さらに幾つもの不条理な扱いを受けた後に、最後に「おまけの付けたし」のようにスピーチをさせてもらえた主人公に、白人権力者たちは a calfskin brief case を褒美として与える。その鞆の中に黒人州立大学の奨学金を与えるという文書が入っていたという嬉しい驚きに接し、主人公の気持ちは一気に舞上がる——白人の価値観に自発的に同化した褒美として大学進学の手助けを得たわけで、祖父に対する勝利感を一時的に味わう。しかし高揚した主人公のその夜の夢に、主人公を嘲笑する形で祖父が出てきて、鞆の中を見よと命じ、鞆の中を開けたら封筒、その中の封筒、さらにその中の封筒という具合に、永久に中身が見られそうにない封筒の山があり、へとへとになってついに最後の封筒を開けると、“Keep This Nigger-Boy Running” (33) と書かれた紙が出てくる。このくだりは、「黒人が、アメリカ社会の捻じれた不条理的価値体系をそれとして認識せずに、それどころか認識することを自発的に放棄し、アメリカの民主主義を信じ、希望を持って努力し続ける——走り続ける——ことによって、現存の体制はますます盤石になる」ということを意味しており、夢の中で鞆に入っていた紙きれと現実に鞆に入っていた「奨学金を与える」という書類とが、本質的には同じ意味であることを象徴的に表現している。小説出発点の主人公は、このようにアメリカの理念、理想、夢を丸ごと受け入れているのだが、この理念受諾は次々に裏切られてゆく。小説は、主人公の中のアメリカの理念信奉が、遍歴の果てに最後に徹底的に崩されるまでの過程を、Epilogue に至る寸前まで描き続ける。

本筋から少し外れるが、主人公が行なう卒業スピーチに含まれる歴史的な意味について軽く述べておきたい。「白人と黒人の融合」という白人権力者にとって都合がいいこのスピーチは、小説の中では、白人に認められることばかりを目指す優等生の主人公が考えて書いた原稿だという設定になっているが、実は黒人大学 Tuskegee Institute を創設した黒人教育者 Booker T. Washington が 1895 年に Atlanta で行なった、通称 “Atlanta Compromise” と呼ばれる有名な演説を、作者 Ellison が一字一句に至るまでコピーしたものである<sup>5</sup>。Booker T. Washington は、同時代の黒人指導者であった Frederic Douglass とは対照的に、後世の視点に立てば、白人追従の裏切り者のようなイメージで塗りこめられることになる。Washington が創立した黒人大学 Tuskegee Institute は、*Invisible Man* の舞台となる黒人大学のモデルになっており、また小説中の学長 Dr. Bledsoe は Washington が原型となっていて、否定的な価値を付されている。

20 世紀末である 1995 年に Tuskegee University と改名されたこの大学の構内には、19 世紀の創立当初から立っている Washington の銅像があり、*Invisible Man* の中の大学にも同じ銅像がある——つまり小説内の大学は Tuskegee とほぼイコールだということを示している——し、作中でも銅像が持つ象徴的な意味への言及がなされている。興味のある方は、ネットで “the statue of Booker T. Washington” を検索してくれば、この銅像の写真を何枚も見ることができる。立派な

衣服を着て立っている権威を帯びた Washington が、腰布以外は裸の、跪いた黒人奴隷の頭のヴェールを取り除こうとしている像であり、衣服や姿勢などで、権威を持つ者と持たぬ者の対照を露骨に示した像である。この銅像が本来意図していたメッセージは、「教育のない黒人に、識字に象徴される教育を授け、それによって黒人の社会的上昇を達成しようとした」という Washington の業績の礼賛であったろう。しかし少なくとも創立当時の Tuskegee Institute は、人種差別を受諾し、それに適応する従順な黒人職人を養成する職業訓練機関であったし、Washington が与えようとしていた「教育」は実は、黒人の本性を抑圧する類の「教育」に他ならなかった。だから、明らかにこの銅像がモデルになっている小説中の銅像に関して、主人公は以下のような重大な疑念——この教育は、人間を無知から解放するのではなく、無知 (blindness) をさらに強化するものではないか——を当初から抱かざるを得ない。

In my mind's eye, I see the bronze statue of college Founder, the cold Father symbol, his hands outstretched in the breathtaking gesture of lifting a veil that flutters in hard, metallic folds above the face of a kneeling slave, and I am standing puzzled, unable to decide whether the veil is really being lifted, or lowered more firmly in place, whether I am witnessing a revelation or a more efficient blinding. (36)

主人公の心の目に映る創立者の抑圧性——アメリカの現実に対して盲目になれという抑圧性——は、小説中の二代目の学長 Dr. Bledsoe にそっくり受け継がれている。

第2章から、主人公の遍歴が始まるが、特に第2章から第6章の途中（147ページ、つまり全篇581ページの *Invisible Man* の25%強）までは、ある年の初夏のたった2日間のことであり、この2日間で主人公の運命は激変する。この前半の流れを一応第12章までと考えて、概説してみよう。進学した黒人大学で優等生となり、学長である Dr. Bledsoe の覚えがめでたくなっている主人公は、大学キャンパスを訪れた白人富豪（大学に莫大な寄付をくれる理事）Norton 氏の案内を任せられる。主人公は白人に気に入られることのみを念じて案内するが、Norton 氏の指示に従う限りにおいて、黒人エリートが白人に最も見せたくない劣等黒人の人々を Norton 氏に見せることになる。一人は、暖房もない極貧生活ゆえに家族が体を寄せ合って暖を取るしかない夜に、眠っているさなかに実の娘と性関係を持ってしまい、娘を妊娠させてしまった男 Trueblood であり、第二は、売春婦や精神病院の患者たちが集まるいかわしい酒場 Golden Day の人々である。これらの「劣等黒人」の本質をまとめて言うならば、黒人の魂（そして Trueblood の名前に即して言えば、黒人の血）を恥じたり否定したりすることなく保持しているがゆえに、黒人社会の賤民<sup>アウトカースト</sup>となっている人々であり、彼らの存在自体が、自発的に白人に迎合する上昇志向の主人公が失っているものを明らかにする。前者の Trueblood は近親姦を犯した獣的な存在として、黒人社会の恥部として扱われているが、彼の自己像にはブレがなく、苦悩と恥辱を含めてあるがままの自分を受け入れており、



自己抹消をしていないことは、以下のセリフ “I makes up my mind that I ain’t nobody but myself and ain’t nothin’ I can do but let whatever is gonna happen, happen” (66) に明らかである。酒場の客で、精神病患者である黒人医師——というより KKK によるリンチによって「狂人」にされた医師——は、白人の意に適うことばかりを考えている主人公を, “...a walking zombie! Already he’s learned to repress not only his emotions but his humanity. He’s invisible, a walking personification of the Negative, ... The mechanical man!” (94) と、その空虚さを痛烈に暴き出して見せる。かくの如くに、Trueblood とこの狂人医師は、アメリカ社会が黒人に要求する自己抹消をしていないために賤民になっていることを納得されるだろうか。主人公は、Norton 氏をこのような黒人たちに会わせたために大学を危機に陥れたという、理不尽と思える理由を言いたてられて、即座に大学を退学させられる。白人権力者に追従しながら、その白人を牛耳っていることを自負する、黒人学長にして専制君主である Dr. Bledsoe が主人公を退学に処す理由は、白人が期待しているものだけしか見せてはいけないという当然の掟に違反したということである。しかし、白人に見せてはいけないものは、とりもなおさず従順な黒人が見てはならぬものでもあるのだから、自分の本性を抑圧しきっている主人公が「見てはいけない」、黒人として人間本性のあるべき状況を見てしまったためであると言い換えられるだろう。退学になるまで、主人公が役割モデルとして模範にしていたのが、Booker T. Washington (18) であり、Dr. Bledsoe であった。この小説に関する限り、Washington と Bledsoe は同一のイメージで描かれている。

学長は、一方で主人公を退学させておきながら、「夏休み明けの秋学期から大学に復学させてやる、秋学期の学費を稼ぐために New York に行くがいい、ついでにはアメリカでも最高に金持ちである New York の白人たちに、就職斡旋依頼の推薦状を書いてやる」と、懐柔策も繰り出す。それを信じて即刻 New York に出た主人公は、アメリカ経済界の大立者と知り合いになって、その大立者のもとで自分の有能性が認められ、ビジネス界の成功者になるということばかりを夢見て——「アメリカの夢」を信じ切っていて——、黒人臭を消すようなコロンを付けよう、南部なまりを消そう等々の、自己の本質を抹消する決意だけを固めている。しかし、主人公は学長からの推薦状を6人の大立者の秘書に届けても、その6人の大立者の誰とも会うことはできない。主人公は秘書のところにはしか到達しないのだが、どの秘書も希望をほのめかすようなことを言うばかりで、どこからも「採用決定」や「採用拒否」の通知は一切なく、完全に宙ぶらりん状態に置かれたままである。この部分は、フランツ・カフカの小説『城』の雰囲気とよく似ており、すぐにも到達できそうな目標点「城」が目の前にあるのに、そこに近づく道が分からないという不条理な状況である。主人公は最後の7通目の推薦状を届けた折に、残酷な真実に直面することになる。学長の Dr. Bledsoe の推薦状の内容は、主人公の職の斡旋を依頼するどころか、反対に「この若者に絶対に職を与えないください」「しかし、その事実をこの若者が知ることがないようにしてください、彼が、自分が受け入れられないという事実を知らないまま、空しい期待を抱き続けるようにしてください」という、完全な裏切りの内容だったことを知る。この裏切りの内容を分かりやすく言い換えれば次のような

ことになる。主人公が、アメリカの理想・理念への信頼を抱き続け、決して実現されることがないはずの未来への期待だけを持ち続けるようにすることが、黒人の自己覚醒を妨げ、ないしは遅らせ、その分、既存の権力構造の維持が果たされる。黒人が自分の本性やアメリカ社会の実質に気付くことなく、未来への期待ばかりに目を向けて努力すること、黒人を無意味な約束で無意味に走らせ続けることこそが、アメリカ社会維持の掟の本質なのであり、高校卒業の日に見た夢の中で、祖父が指し示した紙に書いてあった言葉“Keep This Nigger-Boy Running”は、このことを予示していた。

何故同じ黒人である Dr. Bledsoe がこのような裏切りをするのだろうか。この小説では、主人公と出会う人々は、生身の人間というよりも、仮面劇の人物のようにある種の極端な役割を果たすものとして主人公に接するのだから、人間的な心理はなかなか推測し難いが、敢えて言えば、「白人権力と結託している限りにおいて自分の絶大な権力を維持できる」のが Bledsoe であり、従って黒人の目覚めを先延ばしにして、黒人を空しい希望で走らせ続けることで自分の権力の永続性を目論んでのことだと説明できる。

信頼していた学長 Dr. Bledsoe の信じ難い卑劣な裏切りに激怒し、かつ自分の輝かしい未来も閉ざされた（もともと、そんな未来は開いていなかった）ことを悟った主人公は、このアメリカ社会で黒人である自分が野心的になることは自己抹消に他ならないとようやく理解し始める（最初の目覚め）。アメリカの中のリーダーないしはエリートになるどころか、今や生活費も底をついた主人公は、成り行きから Liberty Paint という名の、白ペンキを最大の売り物としているペンキ工場に就職する。その初日に、この工場でいくつもの不条理なトラブルに巻き込まれ続け、果ては工場の爆発で大怪我をして病院に収容されるまでを描くのが第 10 章であるが、このペンキ工場は白いペンキが売り物で、1 缶の白ペンキにきっかり 10 滴の黒ペンキを入れてかき混ぜると、白が一層際立つということになっている。これは、このペンキのありようがアメリカ合衆国の人種問題の象徴だということである。否、工場自体がアメリカ国家の象徴であり、その中で意味が分からないまま、一つの部署から別の部署へと、またあちらへと意味もわからないまま「走り続けさせられている」主人公は、アメリカ黒人の現状を象徴している。

工場の爆発で怪我をして担ぎ込まれた病院も、また一種の洗脳工場、ロボット工場みたいなところで、良心の呵責もなくロボット手術を他者に施そうとする医者たちの世界である。ここで主人公は、ガラスの装置に入れられて（棺の象徴であろう）電気ショックにかけられる——第 1 章の電気ショックのイメージの反復であり、このような象徴的経験の反復は、この小説に幾つも見られる——し、やがてガラスの装置から出されることは、象徴的な死から、従来とは異質な生へと回帰したことを意味すると読めるだろう（目覚め）。野心も希望も収入も失った主人公は、黒人街の Harlem の親切な黒人中年女性 Mary の家に下宿させてもらうことになる。この下宿暮らしが、第一の無為の「冬眠」であり、小説はこの第一の冬眠から目覚めた主人公が新たな放浪経験を経て、第二の「冬眠」に至るまでの後半部へと繋がる。

## 3

無為の暮らしのまま冬を迎えたある日、主人公は **Harlem** を歩き回りながら、新たな自分へと覚醒し始める。冬の名物の焼き芋売りの匂いに強烈に惹かれ、故郷南部で味わった焼き芋への強烈な愛着を思い出す。黒人の食べ物である焼き芋への郷愁を契機に、それまで自分が黒人的な特徴や嗜好——“birthmark” (266) ——を消すことばかりに意識と努力を費やしてきたことの無意味さを痛感し、“What and how much had I lost by trying to do only what was expected of me instead of what I myself had wished to do?” (266) と自問する。このように、白人の価値基準に自発的に迎合するという、当初に刷り込まれた意識から、主人公はここで大きく脱皮し始める。白人に認められて出世していくという野心を手放した主人公は、**Harlem** で貧しい老黒人夫婦がアパートから強制立ち退きさせられて、雪の降る戸外へ放り出されている悲痛な場面を目撃して、スピーチしたい情熱に再び目覚め、貧しい黒人老夫婦を救うための演説をして、白人権力に対する貧しい黒人たちの小型の暴動を惹き起こすことに成功する。この出来事は、次の展開、即ち、その場面を目撃していた左翼政治組織 **Brotherhood** のリーダーである白人の **Brother Jack** に、組織に加わり、演説者として力を発揮してほしい——特に黒人民衆が持っているエネルギーを政治行動に向けさせる役割を担ってほしい——とスカウトされる局面へと繋がる。主人公は、その組織を胡散臭く感じはするものの、稼がないまま **Mary** の好意だけに頼って居候している自分の現状には安らげないため、金稼ぎのための仕事として組織に加わることを決意する。この政治組織に属することは、新たな迷宮じみた不条理の世界に入ることでもある。まず、自分の名前を捨てて組織から与えられた名前のみを名乗ること、従来の世界と完全に接触を断つことを要求され、その後で連れて行かれた場所は、**New York** の高層マンションの豪華で広いフラットであり、そこがこの組織の事務所兼所有物となっているらしい。なぜこのようなフラットが左翼組織のものになっているのかも分からない。主人公の前に開けた世界は、このように不条理な迷宮の様相を呈しているが、既に白人社会の価値基準に自らを迎合させる事を放棄している主人公は、“I would be no one except myself — whoever I was.” (311) という決意段階に入っており、この不条理の迷宮中でも、芽生えたばかりの自己を保持していけると信じている。この段落で、主人公に意識の覚醒が起こりかけていることが見て取れる。

左翼政治組織 **Brotherhood** は、資本主義を旨とするアメリカの価値体系とは正反対に思えるが、それは表面上だけであって、本質的には小説前半において主人公を疎外し続けたアメリカの教育界とビジネス界の価値体系とほとんど変わるところがない。この左翼組織は、主人公の卓越した演説能力と組織能力<sup>オルグ</sup>を認め、彼に優れた黒人指導者になる「夢」——決して実現されない「夢」の部分だけ——を「約束」する。この組織が提案する主人公の未来像のモデルは、奇しくも前半の大学在学時代に主人公が目標とした (18) のと同じ **Booker T. Washington** (305) であり、この役割モデルの同一性が、前半の大学やビジネス社会の価値観と、後半の左翼組織の価値観が根本的に同一であることを示している。そして、小説前半において、価値判断と運命決定のすべてが、主人公を離

れた外部の不条理な力によって行なわれていたのと同様に、小説後半の *Brotherhood* においても、「組織の絶対的な決定権」が頻繁に持ち出され、主人公の自己決定権は当初から完全否定され、主人公は不条理な力に翻弄され続ける。組織に入る時の自己保持の決意はいつの間にか消えてしまっている。

彼の運命の激しい上下運動の概略を見てみよう。この組織の演説者としてデビューした日に、主人公は黒人聴衆の気持を高揚させるのだが、組織はその業績を完全に無視し、「科学的でない」というだけの理由で主人公を完全否定し、イデオロギー学習の個人教授を受ける義務を課す。そのイデオロギー学習期間も主人公の意思とは全く無関係に、組織からの通告だけである日突然に終了し、主人公は *Harlem* 地区の最高責任者という高い地位に就けられる。彼は献身的にその仕事をこなして、黒人民衆からの高い支持を得るのだが、組織の指示に忠実に従っているこの時点の主人公には、彼本人の実像の部分と、彼とは違う仮面の部分がある——彼の政治名で発表された論文は、彼自身が書いたものの他に、彼が知らないゴーストライターが書いたものも大量に含まれており、彼が望もうと望ままいと、彼自身の本体は薄められ、*invisibility* の方向へ進まされている。そのような主人公がマスコミで “one of our most successful young men” (396) として取り上げられるようになると、組織は証拠皆無であるにもかかわらず突然に、主人公を「組織を害する危険分子」と決めつけ、左遷する。その左遷から、元の地位への復職も組織からの一方的な通告だけで決められるが、*Harlem* 地区の最高責任者に復職してみれば、*Brotherhood* が黒人たちの支持を完全に失った壊滅状態になっている様を見るばかりである。主人公や彼の仲間である人々が努力して作り上げていたはずのものは、彼の左遷中にすべて無に帰しているし、信頼できる仲間も皆消えてしまっている。何故このような理解できない状況になっているのか、何故、組織の側の黒人に対する政策が変えられたのかを白人指導者の一人に訊くと、「組織はとある政治勢力との連帯を結ぶことになり、そのために黒人を犠牲にして切り捨てることにしたが、そのことは黒人に内緒である。組織から消えた黒人メンバーは消耗品である (*expendable*)」という本音を聞き出し、ついに主人公の組織に対する不信感は決定的になる。

信頼する価値を完全に失った組織に対して取るべき道が二つあると主人公は考える。一つは即座に組織を辞めることである。ここまでひどい扱いを受ける組織の中にいることは耐えがたいが、組織の外に出ることは、さらに別の絶大な恐怖である。組織を抜けたメンバー *Clifton* の身の上を自分に重ねて、主人公はその恐怖を次のように述懐する。“Why did he choose to plunge into nothingness, into the void of faceless faces, of soundless voices, lying outside history?” (439) しかし、*Clifton* の死と自分の努力のさらなる完全無意味性を突き付けられ、自分が *invisible* であると否応なく思い知らされた主人公——“I now recognized my invisibility” (508) ——は、辞めるだけでは組織に裏切られた怒りがおさまらなさと感じており、組織の犠牲になった人々の弔い合戦をするためにも組織に残り、組織に完全に忠実である振る舞いをして、組織を破滅に追い込んでやろう、“I’d overcome them yeses, undermine them with grins. I’d agree them to death and destruction” (508) と

決意する。ここに至るまでのさまざまな時点で、祖父の幻影は主人公に付きまとい続けていたが、それが最も直接的な形でここに現出し、ここにおいて事態は第1章の冒頭場面の祖父の遺言——“I want you to overcome 'em with yeses, undermine 'em with grins, agree 'em to death and destruction” (16)——へと回帰する。

祖父がアメリカの価値体系に裏切られて、面従背反を通じて、アメリカの価値体系と社会を破滅させることを切望したのと同様に、孫である主人公は、前半において教育界とビジネス界の面でアメリカの価値体系に裏切られ、後半においてアメリカの価値体系をグロテスクに純粹培養したと言える左翼政治組織に裏切られて、この左翼組織の破滅を切望し、画策する。主人公のこうした願望に符合するかのように、Harlem で大規模な暴動が起こる。これは1943年に実際に起こったHarlemでの暴動をモデルに描いたものである。捌け口のない不満にあえぎ続けていた黒人は、ついに暴動をおこし、大規模な破壊、大規模な略奪を始め、Harlem は徹底的に危険でアナキーな祝祭の様相を呈する。圧巻は、黒人住人たちが自身が、自分たちが現在住んでいる不潔な極貧アパートを、「人間の住むべき場所ではない、人間の尊厳を侮辱する場所である」との判断に立って、住民を安全に立ち退かせたうえで、建物全体にガソリンをまいて放火して焼け落とさせる場面である。炎、火花、砕け散る商店のガラス、警官たちが発砲する銃声、騎馬警官たちが乗る馬が人間たちの中に突っ込んでくる様、略奪や酒に酔いしれ、危険で破壊的な祝祭を楽しむ黒人たちの無秩序の様、二階から吊るされた白人女の不気味さと、それがマネキンだったという肩すかし、等々、迫力に満ちた暴動の様が描き出される。主人公も、暴動に加担しながら、黒人たちが独自に成し得たことに高揚感を感じる。

I was seized with a fierce sense of exaltation. They've done it, I thought. They organized it and carried it through alone; the decision their own and their own action. Capable of their own action... (548)

その高揚感の中に、主人公を白人との結託者であると断定し、殺そうとする極端な民族主義者の黒人 Ras (Rastafarian<sup>6</sup> の象徴) が現れ、黒人と黒人の死闘が始まるに及んで、主人公は、「黒人と黒人を戦わせ、銃を持った警官に黒人を狙撃させる事態を起こすことこそが、Brotherhood の白人たちが計画していたことであり、暴動を起こすことは実は黒人を危機にさらすことだった」と突然に悟り、黒人同士の殺し合いを止めるように叫ぶが、その声は誰にも届かないし、主人公を捕まえて「処刑」しようとする民族主義者 Ras の追撃と、それとは別の警官たちの追撃の両方から、方向も分からないまま逃げている主人公は、マンホールの穴に落ちて、やがて地下にある忘れられた部屋にたどり着いて、地下生活者となる。

マンホールに落ちた直後、暗闇の中で灯りを得ようと、肌身離さずに持ち続けていた例の the calfskin brief case の中に入った書類を燃やしている最中に、主人公は、自分を Brotherhood にス

カウトした白人リーダーの **Brother Jack** が、そもそもの初期の段階から主人公を陥れる陰湿な裏切りをしていたという衝撃の事実を知る。これは、前半の放浪ドラマの果てに、主人公が大学の学長 **Dr. Bledsoe** の壮絶な裏切りを知ることと対をなしているし、二つの裏切りとも手紙によって発覚することも同一である。主人公を組織の一員としてスカウトした **Brother Jack** が当初から主人公を裏切り、主人公の努力が無駄になるようなやり方で「走り続けさせよう」(568) としていたことに、あらためて大きな衝撃を受ける。この衝撃は、主人公の悪夢の中で次のようなイメージに結実する。「黒い川のほとりで、主人公は今まで彼を走らせ続けてきたすべての人たちに取り囲まれ、元の位置に戻って走り続けるように迫られるのだが、彼らが強いる幻想も運命も拒絶する。すると彼らは主人公の体を押さえつけ、**Jack** がナイフを取り出して主人公の睾丸を切り取って、投げ捨てる。しかし主人公は激痛の中で、『痛みという犠牲を払うことによって今まで見えなかったものが見えるようになった』と宣言し、未だに本質を見られないままの彼らに一矢を報いる」。この悪夢から覚めた後、自分は故郷にも組織にも **Mary** のところにも戻れない人間になった、誰にとっても自分が *invisible man* であり続けていたということを確認する。以上が、全編 581 ページの中の 571 ページである。このように、作品は *invisibility* の範囲内に終始する。

#### 4

この壮大なドラマの帰結として *invisible man* になったと自覚した主人公は、自分の居場所を失い、**New York** のビルの秘密の地下室で暮らすことになる。主人公は小説冒頭の **Prologue** で “I am an invisible man.” (3) と宣言する。「僕」という主人公は通常の肉体を持つ通常の間人であるが、世の人々が「僕」の方を向いても、「僕」でないもの——例えば自分が勝手に抱いている黒人イメージとか、無限に搾取してよい “**natural resources**” (508) とか——でしか見ようとしないうために、「僕」が *invisible man* になったのだと説明がなされる。これは主人公一人の運命ではなく、アメリカ社会で公文書の約束から常に外され続けてきた黒人全体の運命の象徴である。主人公はこのような状態への憤りに駆られており、その憤りゆえに、**New York** の夜の路上で行きずりの人間を半殺しにしたり、アメリカ社会の秩序を無視したり「ふて腐れ」の不法行為に駆り立てられながら、無為の「冬眠」生活を送っているのだが、**Prologue** の最後で「自分がこうなった成り行き話を聞いてくれ」と、読者に語りかける。そこから、今見てきたような全 25 章に及ぶ不条理な放浪のドラマ（物語の本体）が展開され、その必然的な帰結として絶大な幻滅と裏切りと去勢の悪夢が提示され、居場所も所属する場もすべて失ったことを主人公が確認する。

冒頭の **Prologue** と全 25 章のドラマで、小説全体の 98.3% を占めるのだが、さらにその後、1.7% に相当する 10 ページの **Epilogue** が付け加えられている。この **Epilogue** で主人公は来し方を総括的に述べながら、行く末を考える。今まで動き続けていた主人公は肉体の動きを止める代わりに、思索を進めるのだが、ここでの思索は、それまで展開し続けてきた話の流れを突然何の脈絡もなく 180 度転換させる内容になっている。それも、論理飛躍した抽象的なイデオロギーの話ばかりにな

る。この突然の転調を、次の比喩を使って言えば分かってもらえるだろうか。小説の98.3%は、主人公がアメリカの現実の中に頑として存在する残酷な不条理さにさらされ、主人公がその不条理さに苦しむ物語であるが、残り1.7%のEpilogueに至って、主人公が話す内容が、それまでの話とあまりにかけ離れた、論理飛躍した理解不能な不条理となり、今度は読者がその不条理さに苦しめられることになる。

どのような「転調」が起きているのだろうか。これまでのドラマで、アメリカ国家による黒人に対する裏切りの面を描き続けていたものが、最後の10ページで突然に、アメリカの建国の原則を礼賛し、黒人側に責任受諾の義務があると言い、それまで自分が明確に否定してきた責任や愛を、ここでは高らかに賞賛し、さらには人生を礼賛する。これに接して、当然ながら読者は当惑しないではいられないだろう。具体例で、「転調」の実態を示そう。これまで頻繁に主人公に取り憑いていた「白人を死と破滅 (death and destruction) に追い込め」という祖父の遺言——“I want you to overcome ‘em with yeses, undermine ‘em with grins, agree ‘em to death and destruction” (16 イタリックスは引用者)——の内容はEpilogueで逆転され、完全否認され、その上さらに、祖父が真に意図していたことは、実は「アメリカの建国の原則の肯定」だったと、正反対の解釈が何の根拠もないまま強弁される。それも、以下の引用に見るように、最初は「ひょっとしたら」という程度の突然の思いつきの推測が、直後には「これに違いない」という強固な断定に変えられている。その様を以下の引用で確認してもらいたい。これは、祖父が「白人に死と破滅をもたらせ」と言った遺言の内容を、突然に従来の解釈、語義通りの解釈とは正反対の内容を意味していたのではないか、否、そうに決まっていると、唐突に断言し、その意味を揺るぎないものとして確立する文であり、ここまで主人公に取り憑き続けたり自己疑念を与え続けていたりしていた遺言を、たった一文で逆の意味に変えてしまっている。“Could he have meant — hell he *must* have meant the principle, that we were to affirm the principle on which the country was built and not the men, or at least not the men who did the violence” (574 イタリックスは原著者)。本論で論述してきたように、「アメリカの理念、理想、夢」に対する主人公の盲目的な信奉が、長い放浪の中でことごとく、それも極めて残酷な形で裏切られる様だけを描いてきた果てに、そのドラマの総括部分であるEpilogueで、今まで一度も言及されなかった「アメリカ建国の原則」が持ち出されて、この一文だけで意味が逆転され、その新しい意味に沿った陳述だけが続く。

さらに、小説の舞台となる人種差別が公然とまかり通っていた時代において、否、建国以来まで時間的スパンを広げても同じなのだが、人種問題に関してアメリカ社会は墮落と混乱を呈していたのであり、その状況に対して、私も大半の読者も当然ながら権力のほぼすべてを独占していた白人の側が大半の責任を負うべきだと考えるし、そんなことは自明の理だと思うのだが、Epilogueではそれも否定される。曰く、「自由と平等と個人の揺るぎない権利を謳ったアメリカ建国の原則に最も深く依存し、最も頼りとしているのは黒人なのだ」という理由を持って、原則に対しても白人に対しても全部の責任を負うべきなのは、白人ではなく黒人だと、祖父は信じていたはずだ。読者

としたらついていけない論理を断定的に語る様子を、以下の引用に見てもらいたい。

Or did he mean that we had to take the responsibility for all of it, for the men as well as the principle, because we were the heirs who must use the principle because no other fitted our needs?" (574)

このような理解し難い Epilogue の内容は、作者 Ellison ——彼のフルネームは Ralph Waldo Ellison ——の父親が心酔して、息子にその名前を付けた由来元である 19 世紀の思想家 Ralph Waldo Emerson の思想を取り入れたことから生じているといろいろな論文が述べている。しかし私自身が Emerson に関心がないので、Emerson 思想を持ちこんだか否かに関わらず、それ以前の 98.3% と深刻な不整合が生じている、脈絡がないまま、180 度変わっているということを確認しておく。

これらの不整合を、さらに別の例で示し、論じてみよう。まず「責任感」である。New York の地下室で暮らし始めた時点の主人公は、ふて腐れから不法行為を平然と犯すようになっており、そのような自分を「今まで存在した中でも最もひどい無責任な人間である」と宣言し、さらにその無責任さを “But to whom can I be responsible, why should I be, when you refuse to see me?” (14) と正当化している。ところが、主人公が、この引用の言葉を吐いたのと時間的距離はごく近いはずの Epilogue では、責任という観念が強く打ち出される。次に「愛」である。主人公は自分の性癖を “I couldn't give much thought to love.” (177) と自認しており、この言葉そのままの、愛への無関心の態度を作品全体で貫いてきたはずなのに、小説の最後から 2 ページ目で、突如「世界を救う愛」を高らかに宣言することになる (580)。さらに、去勢の悪夢に象徴されるように極度の絶望状況に陥ったはずなのに、最後の 5 ページで、「この世界は無限の可能性 (infinite possibilities) に満ち、下劣であると同時にこの上なく素晴らしい (vile and sublimely wonderful)」(576) と礼賛の意味づけをしてくる。グロテスクなユーモアで絶妙に味付けされた、カフカの不条理さのドラマを展開する第 1 章から第 25 章までは実に面白い物語であるが、その物語を挟み込む Prologue と Epilogue と物語本体との間、特に物語と Epilogue の間のズレはあまりに大きい。この作品がピカレスク小説であることは先に指摘したが、ピカレスク小説は終わらせ方が難しい特徴を持ち、とかく無茶な終わらせ方になる (例、*Huckleberry Finn*)。この小説の「穴に落ちる」という設定も、終わらせようのない堂々巡りの旅を終わらせるために、作者が設定した策である。*Huck Finn* の結末の無様さと同様に、Epilogue の唐突さは大きな失敗である。

ここから先の Epilogue の考察は、invisibility の多義性の実態を見た後に回したい。一つの言葉の中に、さまざまなレベルの invisibility が混在しており、その混在性が、Epilogue の特異な書き方とどう関わっているのかを述べる。



## 5

*Invisibility* は、まず第一に黒人全体に及ぶ意味、つまり「黒人 = *invisibility*」であり、1964年に公民権法（Civil Rights Act of 1964）が成立する以前のアメリカで、黒人全体が被っていた運命の象徴としての意味である。その概略を述べると、南北戦争終結の翌年の1866年、白人と同等の黒人の市民権を保証する Civil Rights Act of 1866 が連邦議会で可決されたが、この法律は以後100年間にわたって、法として存在するものの、実施されずに放置され続けた。この事実象徴されるように、平等、民主主義、幸福の追求権等々のアメリカの公文書が誇らしく打ち出す理想的な理念は白人だけに当てはめるもの——当てはめるべきもの——であり、黒人はそれらの理念の適用を受けることがない人々であり続けた。または適用を受けたとしても、極めて不完全な形でしか受けられなかった。このように、アメリカの理念に照らす限り、黒人はアメリカにおいて *invisible* な存在であり続けた。この内容を表すメタファーとしての *invisibility* は、強い印象を読者に伝える優れたメタファーである。この小説で主人公が言う *invisibility* の大半は、自分が（またすべての黒人が）黒人であるという理由をもって、他者によって *invisible* にされているということである。この小説が出版された1952年は、言うまでもなく公民権法成立以前であり、小説開始時と小説終了時の両方のアメリカにおいて、法的・政府度的な人種差別は存在し続けていたのだから、*invisibility* の状況に一切変化がない。だからこの *invisibility* の意味のみに関して言えば、小説の最初と最後が、この状況から抜け出すヴィジョンを欠いた平板性であることも、当然と言えば当然か。

黒人民族の *invisibility*、それを受けた黒人個人の *invisibility* は、このように説明すれば理解できるものであるが、個人が自分の *invisibility* を自称することは、少し整理して考えないと理解できない。他者（白人）が黒人を見る時、自分に都合がいい勝手な概念だけを見て、黒人の人間としての生身性を見ない。これが *invisibility* である。しかしこの時黒人には生身の自分が見えているのだから、自分が *invisible* であるなどということはありません。従って、黒人である主人公が作中で *invisible man* を自称する時、他者——それも主人公を否定し、無視し、裏切るだけの他者——の観点に立って、その観点から見える自分を語っている。この時、主人公の中には当然にも「自己」があるはずであり、その「自己」はこうした他者の意味づけによって大きく傷つけられ、混乱させられずにはいられない。

小説開始時の若い主人公は、白人に迎合することで自分の前にアメリカの夢が開けるはずと信じており、「間違った形」の自己肯定と自尊心を持っている。この時の主人公は、「*invisible* であるのに、その事実を認識していない」と意味づけられている。しかし、今述べてきた *invisibility* の第一の定義に照らすと、これは変な話になる。公民権法成立以前のアメリカでは、法的・制度的な人種差別が横行していたのであるから、「黒人である自分が差別された階級に置かれている = *invisible* である」ことを認識せずにいられたはずがない。こうした意味の混乱を理解するには、さらに別の *invisibility* を見て行かねばならない。

*Invisibility* が、敵意を持つ他者の視点のみに由来するという先に示した主張（「すべての黒人は自動的に *invisible* になる」という図式）とは別種の *invisibility* も、この作品の中に幾つか出てくる。第二のものは、自分の本性を自発的に抹消しようとする人間が *invisible* なのだという、酒場 *Golden Day* で出会う狂人の黒人医師の指摘である。個人的な能力の欠落ゆえに、個人的に *invisible* な状態に閉じ込められたままだという内容である。医師の言葉は先にも短く引用したが、今の問題を論じるに際して思い出す必要であるので、詳しい形で再度引用する。

... he fails to understand the simple facts of life. [...] He registers with his senses but short-circuits his brain. Nothing has meaning. He takes it in but he doesn't digest it. Already he is [...] a walking zombie! Already he's learned to repress not only his emotions but his humanity. He is *invisible*, a walking personification of the Negative, the most perfect achievement of your [i.e. white people's] dreams! The mechanical man. (94 イタリックスは引用者)

この引用全体が、これ以上ないというくらいの否定的な色で塗りこめられている。「白人迎合をするあまり、誰にでも分かる単純な事実を理解できない無知」「事実が目の前にあっても、それを消化して吸収する認識回路を持たない」「自己の本性を抹消し、白人の基準のみに合わせようとする姿勢は必然的に自分の生命感を否定し (a walking zombie)、自分の自我の核も抑圧する (repress not only his emotions but his humanity)」「故に *invisible* である」。これは、他者に由来する第一の外発的な *invisibility* とは異なる、内発的な *invisibility* ——自分が、自発的に自己抹消をするという精神的盲目性ゆえの *invisibility* ——である。この痛烈な指摘は理解も納得もできるもので「真理」と見なすことができる。そしてこの医師の指摘を論理的に推し進めるならば、次の命題に必然的にたどり着く。「主体の内面が大きく成長し、自己と他者の本質が以前より格段に正確に見えるようになるならば、個人は新たな自我を掴むし、その人の *invisibility* は解消する」。この命題に関して言えば、*invisibility* の段階に留まり続ける *Invisible Man* では、このような成長は起こり得ない。本論冒頭に引用した阿部の定義によれば、主人公は十全に分かっていないからであるし、「認識構造と人格構造の変革」に及ぶ以前の段階を描くピカレスク小説だからである。主人公は覚醒と新しい自己認識の戸口に何度も立ちながら、いずれの場合もこの覚醒は追究されないまま別の話に語りに移るし、これらの覚醒は、去勢悪夢の時の覚醒とはほぼ同質である。つまり主人公は成長しない。

次に第三の *invisibility* である。に、主人公の人間の本質を見ようとしなのは、次の引用に明らかのように、白人や権力者だけではなく、黒人大衆も同じである。

You don't have to worry about the people [i.e. black people]. If they tolerate Rinehart, then they will forget it and *even with them you are invisible*. ...It didn't matter because they didn't realize just what had happened, neither my hope nor my failure. My ambition and integrity were nothing to

them and my failure was as meaningless as Clifton's. (506-507 イタリックスは引用者)

この引用場面は、次のような状況に置かれた主人公の心境である。本名ではない政治上の偽名を名乗って、Harlem の黒人たちのために努力したつもりの主人公だったが、左翼組織上部からは「黒人問題は切り捨てるから、今後は関わるな」という類の指令を受け、一方その事実を知らない黒人たちからは、組織ではなく主人公自身が黒人大衆を見捨てたと見なされるという板挟みの苦境の時の述懐である。黒人大衆が示すこの種の無理解、即ち、「何が現実に関わったかに関する無理解」——知らされていないのだから当然なのだが——、のみならず、主人公の「希望」や「失敗」や「野心」や「誠実さ」に関する黒人大衆の無関心と無理解は、はたしてこれほどに特筆すべき不当なこと、悲劇的事象であるのだろうか。

一般的な現実を述べるならば、黒人社会に限らずあらゆる人間社会において、人々は大半においては互いを機能や記号や抽象——職業、人種、技能や役割、権力や財力の有無、美貌に醜貌、等々——として認識しあう「無理解さ」で反応し合っている。私がここで言おうとしているのは、「あらゆる時代のあらゆる人間社会において、人々が互いに本質を理解しあうのは、ごく限られた密で個人的な人間関係の中だけであるし、人間の対人関係のエネルギーは、全部の人間、遠い人間の本質を見抜くようなしんどいことに耐えられないというのが普遍的な現実である」「従って、この作中の黒人大衆が、本名も知らない主人公の本質を理解しないという程度の invisibility ならば、それは日常茶飯事に過ぎない」ということである。この第三のものは、第一、第二の invisibility とはまた違った、個人的な人間関係のなさを invisibility として嘆く「甘ったれ」レベルのものである。

敢えてこのような一般論を持ちだしたのは、この作品で主人公自身が一貫して、ほぼすべての人と個人的な関わりを拒否し続けていることに注意を喚起したかったからである。例えば、南部の黒人大学では優等生の彼に友人は設定上はいただろうが、学長に退学を宣告されると、友人の誰かに打ち明けることも相談することも一切せずに、即座に New York に発つわけで、主人公と大学の友人との意味ある個人的な関係が存在するとは認められない。New York に出た後の絶えざる放浪生活の中でも、主人公は二回にわたって数カ月間の個人的な繋がりを持つ設定になってはいるが、そのいずれも、次のような一文だけで片付けられている。まず彼を無料で下宿させてくれた Mary の家の数カ月に関して、“So that same night I went back to Mary's, where I lived in a small but comfortable room *until the ice came*” (258 イタリックスは引用者) であるし、Brotherhood でまず主人公が命じられたイデオロギー学習の個人教授をした Brother Hambro との密接なはずの4か月間は、“*Four months later when Brother Jack called the apartment at midnight to tell me to be prepared to take a ride I became quite excited*” (356 イタリックスは引用者) という関わりなど完全に無視する記述だけで終わる。この二人が、主人公にとって深い繋がりを持ちたいような魅力を持たないから関わらないだけだ、と弁明されればそれまでだが、むしろ主人公が「愛に無関心」(177) であり続けているからこそ、このような結果が生じているのではないか。

常に動いている主人公は、個人的な人間関係を持たないし、ゆえに相互のことも知らないし、人間として中身を見ることもない。それを示すさらなる例が以下の引用である。

Too little was known, too much was in the dark. I thought of Clifton and of Jack himself; how much was really known about either of them? How much was known about me? Who from my old life had challenged? And after all that time I had just discovered Jack's missing eye. (498-499)

彼は、自分の側では親しい仲だと思っていた知人、友人に関しても、その連絡先も、その一人が義眼であったことさえ知らないほどに、個人的な関わりは皆無だったと気づかされる。このように、主人公は小説中で一貫して個人的な親密関係を作ることがないし、見返りを求めずに庇護を与えてくれる Mary についても、「個人的な繋がりを持つことは煩わしい」(316)と声明する人間である。つまり、invisibility の冷酷さを最大テーマにした小説で、主人公は自分が invisible になる領域——個人的な密な繋がりを拒否する領域——だけを選んで自分の領域としているという、矛盾の状況が生じていることも確実である。個人主義の自由さと、他者からの理解の不足は、一枚のコインの両面に過ぎない。被害者としての invisibility と自発的な（甘ったれの）invisibility の区別をしようとする自覚は、作者の中にはなく、混同されている。

さらに、Rinehart に関する第四のちょっと異質な invisibility もある。Rinehart とは、小説には直接登場しない詐欺師である。主人公が、自分の命を執念深くつけ狙う Ras 一派を躲すためにサングラスをかけると、たちどころに主人公の個性は消え——“If dark glasses and a white hat could blot out my identity so quickly, who actually was who?” (493)——、周囲の誰もが、主人公に Rinehart という名前で呼びかけ始めるのだが、その Rinehart の身分は、主人公に呼び掛ける合計 10 人以上の人によってそれぞれ全部異なる。賭博師、警官に賄賂を使ういかげわしい男、愛人、牧師、等々。「中身を見てくれない」という invisibility 問題として見れば、中身の存在自体が二重に否定されている。一つは、主人公の中身は、サングラス一つで隠されてしまうような稀薄なものだと露呈されることであり、Rinehart の場合では、中身そのものがあるか否かに関しても作中で大きな疑問符が付けられている。

これほどに多種多様なものが全部 invisibility の一語に入れられているため、読者が意味を読み取ろうとするなら、それらをこのように区別して考えることが必要である。さもないと、矛盾の前でしばしばたじろぐことになる。Invisibility の多義性（不整合）と、1.7%の Epilogue と 98.3%のそれ以前の部分の不整合は、勿論レベルが違うことであるが、ここで少し話が飛躍するとしても、Epilogue へと話題を転じる。Epilogue で、アメリカの建国原則の礼賛や責任の受諾や愛の称揚や人生の素晴らしさを言いたてた主人公の語りは、結論として多様性（diversity, division）の礼賛に行きつく。曰く、すべての混迷や悲劇的な問題の原因は人々を一つの型に同化させようとする強要（conformity）にあるのだと断定し、その対極である多様性を、そうした混迷からの脱出路だと説

く。このような脱出路が見えるようになったのは、自分の人生理解が進んだからであり、アメリカに様々な衝突しあう要素が混在することこそが健全なあり方であり、多様性こそが専制国家をなくす解決策であると説く。

No indeed, the world is just as concrete, ornery, vile and sublimely wonderful as before, only now I better understand my relation to it and it to me. I've come a long way from those days when, full of illusion, I lived a public life and attempted to function under the assumption that the world was solid and all the relationships within. Now I know men are different and that all life is divided and that only in division is there true health [...].

Whence all this passion toward conformity anyway? — diversity is the word. Let man keep his parts and you'll have no tyrant states. (576-577)

なるほど、それぞれがあるがままに衝突しつつ、共存する「多様性」は、アメリカ社会の混迷を解消する力になるかもしれない。しかし、この時点以前にこの種の考察がなされないまま、突然にここで「多様性」礼賛をやられても、これが説得力を持つことはあり得ない。あるがままの「多様性」「分割、衝突」を礼賛するここでの姿勢は、むしろアメリカの(1952年の)現実を肯定する根拠になりかねない。つまり、「多様性」という言葉を振りかざしはするのだが、望ましい多様性と望ましくない多様性を区別し、後者をどう排除するかの展望がないまま、「多様性」という言葉にすべての救済力があるかのように言っても、読者には困惑でしかない。小説の流れの中では、この「多様性」礼賛は、アメリカ建国原則の礼賛や人生礼賛の弃の場合と同様に、主人公を再び小説のスタート地点に立たせ、不毛な堂々巡りをさせるだけになるという懸念を強めるばかりである。脈絡もないまま、安易に一つの価値——「多様性」——を急に持ち出して絶賛しきるこの姿勢こそが、この作品と作者の問題だと、読者に感じさせる。この安易な「多様性礼賛」は、invisibilityの複数の意味を仕分けて自覚することがない作者の態度と深く通底している。だから作者が結末での「解決」を提示しても、それが説得力を持ち得ない。

主人公の内面が堂々巡りを繰り返す平板性から抜けられないからこそ、作者 Ellison は、それを補う、もしくは目立たなくさせるために、98.3%を展開し終えた後に、1.7%の Epilogue の中で、唐突に、それまでの堂々巡りとは違う一大変化たる「転調」で肯定的価値を打ち出すしかなかったのだろう。カフカ的な不条理な物語の提示だけで終わることは、Ellison は安らげず、混迷からの脱出路を示すことで、平板性を超えたダイナミズムを出したかったのだろうが、それが成功したとは思えない。

Ellison が、この小説のエピグラフに、Herman Melville の小説 *Benito Cereno* の最後で出される疑問、“‘You are saved,’ cried Captain Delano, more and more astonished and pained; ‘you are saved: what has cast such a shadow upon you?’” を選んだ時、こうした肯定的価値による「解決」

の結末に不満か不安を抱いていたせいではないかと私は推測する。*Benito Cereno* は、途方もない恐怖体験を長期にわたって経験した船長 Benito Cereno が、最後は彼の恐怖の源であった人物の悪事が露呈してその人物が死刑になる事で、「解決」である安らぎに到達する状況になる。しかし、あまりの恐怖に長期間支配されていた Cereno 船長の顔から暗さが消えることがない。このドラマの一部始終を見ていた別の船の船長である Delano が、「あるべき秩序が戻って解決を見たのに、何故あなたは明るくならないのか」と驚嘆の気持ちを吐露するのが、引用したエピソードである。このエピソードの意図を *Invisible Man* の状況に即して言うなら、「最後の Epilogue で肯定的な価値をたくさん並べて締めくくって肯定的になれるはずなのだが、それでもなお、主人公の物語全体で追求し続けたアメリカとアメリカ黒人の暗さの問題は解決することはない」という、作品の到達点への漠然とした不満と不安の表現であると私は考える。

非常に面白く、優れた作品である *Invisible Man* にも、今述べてきたような弱点があり、それを Ellison は次の作品で克服したかったであろう。しかし、この作品には絶賛の批評しか寄せられなくて、彼は具体的な努力目標を見据えることができなかった。高い評価は作家を励ます力になることは言うまでもないが、それしかないのは問題ではないか。本論で明らかにしたような、現実存在する弱点を指摘する批評家が存在していたならば、Ellison は永久的な足踏みをすることなく、その弱点を一つ一つ克服する努力を次に完成させる作品で実現することも可能であっただろう。ものを書く人が自分の限界を克服するには、作品を完成させる行為を重ねることを通じてでしかあり得ない。Ellison が受けた絶賛一辺倒の *Invisible Man* に関する評価は、観点をずらして見れば、不幸なことだったとも言えるのではないだろうか。

#### [注]

- 1 テキストは、Ralph Ellison, *Invisible Man*, New York: Vintage Books, 1995 を使用した。括弧内の数字はページ数を示す。
- 2 Ellison は Oklahoma で生まれ、Alabama の Tuskegee に進学し、学資稼ぎのために New York に出て、そのまま作家修業の生活に入ったと考えてよい。しかし New York に出た翌年に母親が死去し、その母親が生前に移り住んでいた Ohio に葬儀のために赴き、葬儀が終わった後もしばらくの期間 Ohio に滞在して、小説創作の努力を重ねていた。
- 3 阿部勤也、「＜自分の中を掘る＞ということ」、『社会史とは何か』、筑摩書房、1989、p. 31
- 4 祖父の抵抗のやり方は迂遠であるのみならず自己嫌悪と紙一重の危うさを持つ。この小説で主人公は二つの黒人人形——第 15 章の Mary の家にあった黒人の形をした貯金箱と、第 20 章で左翼組織を辞めた Clifton が路上販売している黒人の紙人形——のいずれにも、論理を超越した極度の嫌悪感を抱く (319, 431) し、その嫌悪感はいずれも人形の grin に向けられている。人形にこれほどの拒絶反応を抱くのは、人形が主人公の鏡像だからであり、grin 自体の醜悪さに嫌悪を感じずにはいられないからである。Grin は、相手を蝕む武器であると同時に、こちらをも蝕む危険性をも孕んでいる。
- 5 テキスト 29 ページのスピーチ原稿と、Eric J Sundquist ed., *Cultural Contexts for Ralph Ellison's Invisible Man*, Boston & New York: Bedford/ST. Martin's, 1995 pp.35-36 との同一性を確認することができる。
- 6 Rastafarian (noun) a member of a Jamaican religious group which worships the former Emperor of Ethiopia, Haile

Selassie, and which believes that black people will one day return to Africa (Webster's Third New International Dictionary). 作中に登場する黒人至上主義の指導者 Ras は、まさにこの意味を凝縮して背負っており、従って白人と黒人が共に活動する Brotherhood, および主人公を強く敵視し、主人公をリンチで絞首刑にしようと狙っている。